



子育てを応援します

ぐんぐん すくすく！ 相生っ子！

住所 相生市緑ヶ丘4丁目5-5

電話 0791-23-5070

FAX 0791-22-7211

E-mail ikusei-aioi@nifty.com



◆『いじめ防止サミット』を開催しました。 <8月24日(月) なぎさホール中ホールにて>

市内小学生12人、中学生18人の子どもたちが30名、そして小中学校の管理職、生徒指導担当、児童会・生徒会担当教諭など34人も加わり、兵庫県立大竹内和雄教授の指導のもと、10人のソーシャルメディア研究会の大学生のサポートを受けて開かれました。

他に弁護士、保護司、民生児童委員の方々も傍聴されていて、3時間半にわたり、熱心な話し合いが行われました。



まずはアイスブレイクで緊張ほぐし



市内のアンケート結果を竹内教授から聞く



先生方も本音トーク



子どもたちの真剣なまなざしと一生懸命に考える姿に感動を覚えた。

子どもたちの素直な意見を引き出す大学生のサポートにも感謝。



今回のサミットの実際の様子や話し合った内容等は、『第1回あいおい子育てミーティング～子どもたちの夢を支える集い～』(令和8年12月5日開催予定)でより詳しく報告します。

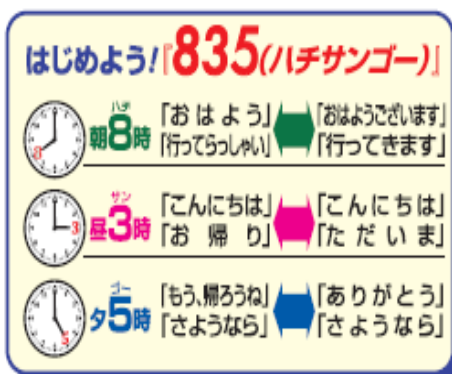
大会冊子で、アンケート内容や「相生市いじめ防止宣言」を紹介するとともに、中学生によるプレゼン発表をします。

一人でも多くの市民の方々に、ご覧いただきたいです。

「ながら見守り」

で子供たちを見守りましょう

「ウォーキング」をしながら
「ジョギング」をしながら
「犬の散歩」をしながら
「水やり」をしながら
普段の生活の中で



Question 子どもとずっと**親密なコミュニケーション**をとりたいのです。どうしたらよいでしょうか。

Answer おりやり子どもとコミュニケーションをとろうとしても、子どもは親を避けようとして
ます。子どもをかまいたい気持ちは分かりますが、**そっとしておくのが一番です。**

しかし、子どもの言動が気になったり、心配になったりするようなことがあれば、率直にその気持ちを伝えましょう

父親によくありがちなことですが、テレビを見たりマンガを読んだりしている子どもに、一方的にちょっかいを出してしまうことがあります。邪魔された子どもは怒り、「きもい」「うざい」などの汚いことばを父親に返します。父親もつい「なんだ、その口の聞き方は」などとなってしまう、コミュニケーションどころか陰湿な雰囲気になってしまいます。子どもとうまく会話するためには、子どもの様子をよくみて、さりげなく、タイミングよく声をかけることが大切です。

Column **母性・父性**

子どもを育てていくうえで、母性と父性という機能はとてもたいせつです。ありのままのその子を受け入れ、認め、そして絶対的なやすらぎを与えるのが母性です。これに対して、これはダメ、こうしなさいというルールやマナーを教えるのが父性です。母性は、何でも許してしまいますが、父性は許されないことを示し、制限します。

母性が強すぎると、甘えん坊で自立できない人間が育ち、父性が強すぎると、わがままで攻撃的な人間が育つと言われています。子どもが健全に育つためには、まず、母性的なものが家庭に必要です。母性的なものが十分に与えてからでないと、子どもは父性的なものを受け入れることができません。

今年の夏も「令和8年熊本地震」「令和8年8月千葉豪雨」と大きな災害が続きました。

亡くなられた方や未だに不安な避難所生活を送られている方々がたくさんおられます。

「災害の一日前に戻れるとしたら、あなたは何をしますか」と、地震や水害などの被害に遭われた方々に問いかけをした『**一日前プロジェクト**』の記事です。

全壊した家の前で気づいた 地域とのつながり

正直なところ、私自身に大きな地震が起こるとは考えていませんでした。日本は地震が多い国だと分かっていても、「自分の住んでいる地域は大丈夫だろう」と、どこかで思い込んでいたのだと思います。家が古く、危ないかもしれないという話を家族がしていても、深く考えることはありませんでした。

最初に強い揺れを感じたとき、母が大きな声で「外に出て」と叫び、弟と一緒に外へ逃げました。家にいたら下敷きになるかもしれないと、母はとっさに判断したのだと思います。私たちはけがもなく無事でしたが、家は全壊し、住み続けることはできなくなりました。地震のあと、周囲を見渡すと、不安を抱えながらも、近くの人を助けている大人たちの姿がありました。

その姿を見て、「もし一日前に戻れるなら、物を準備することだけでなく、怖くても周りの人の力になれる行動ができる自分でいたい」と、強く感じました。この経験を通して、災害は突然起こるということ、そして一人ではなく、地域の人とのつながりが何より大切だということに気づきました。

これからは、いざというときに落ち着いて判断できるよう、日頃から心構えを持ち続けたいと思います。(10代 高校生 石川県)

避難所で分かった 備えていた人とそうでない自分

珠洲では地震が続いていたため、「2023年5月の地震が最大で、これ以上大きなものは来ないだろう」と、どこかで思い込んでいました。災害に慣れてしまい、油断があったのだと思います。

元日の地震のとき、私は家族と外にいました。目の前で家が大きく揺れ、次々と崩れていく様子を、ただ呆然と見てることしかできませんでした。津波を警戒して高台へ逃げましたが、集落は道路が寸断され、孤立する状況となりました。その後は、集落の人たちと一緒に避難所で過ごしました。水や燃料、発電機などは、昔からの田舎暮らしの中で備えていた人たちの物に助けられました。

一方で、自分の家からはほとんど役に立つものを出せなかったことを、悔しく感じました。一日前に戻れるなら、個人だけでなく、集落全体で使える物資や燃料を、もっと備えておきたいと思います。

また、「無理にその場に留まらず、危険なときは逃げる」という判断ができる心構えも大切だと感じました。防災は、決して暗い話ではなく、日々の暮らしを守るためのものだと思います。

この土地で暮らす選択をしたからこそ、土地の特性に合った備えをしていく必要があると、今は強く感じています。(30代 高校教師 石川県)